

センター陸上部には明確な目標があった。「伊達ももの里マラソン」に出場することである。時期は、9月の1週目である。まだまだ暑い。私を含めて部員の多くが参加した。ほとんどのメンバーは10kmにエントリーしたが、一部の軟弱者は5kmに逃げた。

私にとっては、久しぶりの10kmだった。キャプテンのおかげで、一夜漬けよりはましな状態で大会に臨むことができたが、年齢的なことを考え、タイムは最初から意識しないようにした。ほどよい緊張の中、スタートを切ると、意外にもセンター陸上部員が私を抜いていかない。「あれっ」とは思ったが、ならばと、さっさとペースを上げ部員たちをおいていった。

意外と走れると思ったのも途中までで、5kmを過ぎると、ぱたっとエネルギーが切れた。何せ暑すぎた。まだまだ残暑真っ盛りである。あとはまた葛藤である。「やっぱり無理だった」「陸上部になって入らなければよかった」「まったく5kmの連中はいいなあ」「キャプテンには世話になったのでがんばろう」「この苦しみが明日につながる」

もはや修行である。何か求道者にでもなったような気分である。何とか走り切り、無事にゴールはできた。タイムは48分、全盛期に比べると3分遅れだった。間違えた。そもそも全盛期などなかったのだ。1時間かかることを覚悟していたので、妙な満足感があったのを覚えている。

その後もセンター陸上部は活動を続けたが、キャプテンが転勤してしまった。リーダーを失ったため、センターでの部活動はなくなったが、「猪苗代ハーフマラソン」や「郡山シティマラソン」に出たりしながら活動は続いている。こういったメンバーの交流がいい。

ロードレースというのは不思議なもので、私のような一夜漬け人間でも、苦しいとはわかっていながら走りたくなる。わざわざ自分との闘いである50分間を体験したくなる。全く走らなくなった私だが、今でもフルマラソンに出たい気持ちはある。だからといって、相変わらず練習はしない。とはいえ、出るとなれば、さすがに1週間くらいは走るとは思うが。

今となっては、センター陸上部も懐かしく思える。陸上、それも長距離は決して楽しいとは思えない。そうとはわかっていても、走ってみようと思ってしまう。なぜだろう。

梁川高校では、毎年、校内マラソン大会がある。梁川で開催される「三浦弥平杯ロードレース」に梁川高校部門として参加させていただくのである。昨年度は、台風の被害により、弥平杯が中止となった。そこで、本校周辺のコースを使って校内マラソン大会を開催することとなった。

男子が走る様子を見ていた。さすがに速い生徒もいる。女子の番になった。「これなら何とかかなるか」と思ってしまった。全く練習をせずに、一応ストレッチ運動をして、3年女子の部に飛び入り参加をしてしまった。

意外と先頭の生徒と並走できた。だが、いつものごとくである。「やっぱりやめればよかった」「これで遅れだしたらかっこわるいな」などと、葛藤が始まった。結局、私は先頭の生徒のペースメーカーを務めることになった。さすがに、少しは練習しておけばよかったと後悔した。それでも、いい思い出の一つとなった。